

---

# 魔法先生ネギま！オルタネイティヴ

ストームガンナー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！オルタネイティヴ

### 【Nコード】

N51480

### 【作者名】

ストームガンナー

### 【あらすじ】

能力は高いのに肝心な時に大ボカをする最高神に、何度も転生させられ能力・経験ともにかんりのモノを持つ主人公「工藤 雄介」  
。今度の転生先は、正義の魔法使い病が蔓延する魔法先生ネギま！の世界だった！！  
衛士として、魔導師として、そして傭兵として生きてきた雄介は、こんな奴らとうまくやれるのか！？

アンチを含みます。それらが嫌な方は、戻るボタンを押してお戻り

4405°

## プロローグ(前書き)

皆さん、はじめまして。初めて小説を書きます。駄文ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

## プロローグ

転生。簡単に言えば死んだ後、生き返って別の人生を送る。多くは宗教の考え方の一つ。

「だったはずなんだけどねえ……。こう何度も繰り返すと有り難みがないとゆーか……」

彼の名前は『工藤 雄介』。転生者である。

…オオオン……イイン……オン……オン……

真つ白な部屋の窓から外を見ながらため息をつく。そして、疲れた表情で次の転生先選びを開始する雄介。

本来なら最高神が行う神聖な儀式なのだが…現在、その最高神は…

『こちら第503戦車大隊！目標尚も健在なり！爆裂弾の使用許可を求む！』

『H Q了解。全戦車部隊及び機甲部隊に通達。これより使用弾種は爆裂弾に切り替え。なんとしても目標を殲滅せよ！』

『こちら第47爆撃大隊。これより目標に対し第7次爆撃を開始する。巻き込まれるなよ。投下！投下！』

『こちらH Q、リリース総司令より全部隊に通達。『今日こそあの馬鹿神を完膚なきまで叩きのめしなさい！』との事だ。尚、海軍全艦艇に通達。サーモバリック弾頭ミサイルの使用許可が総司令直々に出された』

『了解。全艦、サーモバリック弾頭ミサイル発射準備！』

なぜか『真面目に』仕事をすると、毎度の如く大ボ力を繰り返す最高神はその度に、始末書・減俸・謹慎のフルコース。あげくの果てには、部下や同僚達総出での大リンチ大会でボコボコにされたにも関わらず、真面目に仕事をすると大ボ力をやる癖が直る事なく続き、遂にぶちぎれた天界のナンバー2、夜魔の女王・リリス天界軍総司令発令による、天界軍総出（陸海空合わせた総兵力・8500万）を動員し、史上最大の大お仕置き作戦『オペレーション・オーバーキル・フルボッコ』を開始したのだ。

「いやまあ、そりゃね真面目に仕事してるのに毎回毎回、お・れの！書類整理の時に限ってとんでもない大ボ力やるのは知ってるけど……熾烈だねえ」

窓の外で練り広げられるお仕置きを眺めながら、次の転生先が決まるのを待っている雄介。手元には、転生先決定後に書く書類が置かれている

『……ワシが何をしたあああああ！！』

その最高神の叫びと同時に炸裂する計950発のサーモバリック弾頭ミサイル。まるで核を使ったかのような巨大なキノコ雲が出来上がった。

「すっげー衝撃。ありゃS-11数発くらいの威力だな」

チーン

「お、次の転生先が決まったな。ええっと、転生先は……魔法先生ネギま！の世界……。これはまた……嫌なとこにまあ……。正義の

魔法使い病連中とは…喧嘩確定かなあ」

肩を竦めながら書類に必要事項を記載する。

「能力は…デバイス『ファング』。モードは『撃震』『不知火』…  
つと。魔力量は…はやてと同じでいいか。あとは…オルタ世界で培  
った戦闘技能とエスコン・ゼロ世界で培った空戦技能と判断能力…。  
あとは…特にないかなあ。あ、ついでに…一流の家事技能つと。こ  
れでよし」

その書類を受付の機械に入れる。しばらくして青のランプが光る。  
書類が受理され、その能力が身についた事になる。

「さてと…行きますかね。今度は楽な状況ならいいなあ」

部屋のドアを開け、転生ゲートをくぐる。

雄介の視界が真っ白に染まり、意識を手放した。

## プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？まだ、プロローグですが反応が恐ろしくビビっております。

次は設定となります。

感想などを頂けたら幸いです。



## 設定（前書き）

設定です。

## 設定

名前：工藤 雄介

年齢：本編開始時16歳

身長：185cm

体重：72kg

容姿：マブラヴTEのユウヤ・ブリッジス。ただ、黒髪・黒目。

今までの転生先：MUV - LUV ALTERNATIVE・エースコンバットZERO・リリカルなのはシリーズ

能力：魔力量は八神はやてと同等。使用デバイス『ファング』のモードは、防御力重視の撃震、機動力重視の不知火の二つがある。ただ、使用する魔法は中距離攻撃用魔法の《突撃砲》、遠距離攻撃用魔法の《自律誘導弾》、近接攻撃用魔法の《長刀》《短刀》、面制圧攻撃用の収束攻撃魔法《荷電粒子砲》がある。待機時のファングの形は青いクリスタル。展開時は左手甲にクリスタルが現れる。

性格：来る者は拒まず、去る者は追わず。平時は非常に穏やかな性格。一度、相手を身内と認めると無条件で信頼する。ただし、戦闘時は冷酷とも言えるほど感情を殺す。また、身内及び護るべき対象に危害が加わると、通常の戦闘時の3倍の戦闘能力を発揮する。



## 設定（後書き）

次は本編です。中学入学あたりからスタートします。プロット考えてたんですが、一番はじめやすいので…。

文才のない自分が恨めしい。

## 第1話 初戦（前書き）

お待たせしました。第1話完成です。自分の文才のなさに落ち込んでます。それでは、本編どうぞ！

## 第1話 初戦

転生後、順調に成長し遂に麻帆良学園の中等部に入学した我らが主人公・工藤 雄介。

麻帆良で過ごすこと十年ちょっと。この街の異常さには頭を抱えた。なんせ、普通に走りだけで車以上の速度で走る。建物の壁をなんの道具も使わず登る。明らかにオーバーテクノロジーなロボットが暴れまわる。まさに、常識が通用しない街なのだ。

「認識障害…か。魔法の秘匿の為と言うよりは、魔法使いが自由に動き回るためにやっているとしか思えないな。やはり、歪んでるな」

騒動を起こした生徒を、居合い拳で吹き飛ばす高畑・T・タカミチを見ながら呟く。そして、通学路を眺めたため息を漏らす。

「この学生って…これじゃBETAだな。殆ど突撃級の突撃じゃないか、コレ」

教室に着くと、何人かのクラスメイトと挨拶をしつつ席に着く。それから数時間、退屈な授業を終え帰宅途中に事件が起きた。

「ゲツ！（人払いの結果！？しかも魔力持ちを中に留めるタイプだと！？どこの馬鹿だ、こんなもん使って…まさか侵入者か？くそっ

たれ！！）」

とつさに近くの木の陰に隠れる。見るといかにもな恰好をした魔法使いとその従者が、大量の鬼や悪魔を引き連れこちらに向かって来ていた。

「おいおい…アイツら馬鹿なの？こつちの緩みきつた警戒網のせい  
で対応遅いのがバレてんのか？……………あ、エヴァか。って、正義バ  
カな連中が聞くとお思えないな」

原作でも幾らか記述されていたが、エヴァンジェリンと麻帆良の大多数の魔法使いの仲はお世辞にも良いとは言えない。ほとんど冷戦状態であった。

「はあ…貧乏クジ引かされるのか。やってらんねーな。…ファン  
グ、いけるな？」

『問題ありません。いつでもいけます。…セットアップ』

青色の魔力光が雄介の体を包み、一瞬でバリアジャケットを纏う

「日も落ちきつてない時間だつてのになかなかいい度胸してやがる  
ぜ…まったく。ファング、非殺傷設定オフ、殺傷設定に切り替える。  
この世界じゃ非殺傷設定は意味がない。ここは…殺るか殺られるか  
だ」

『了解。非殺傷設定オフ。悪魔・鬼に対して誘導目標を設置します』  
悪魔や鬼に微弱な魔力による目標を付けると若干距離を離す。

「目標尚も進行中…こちらに気付いた様子はなし。自律誘導弾セット」

『自律誘導弾セット完了。目標との距離230メートル。自律誘導弾発射後、突撃砲及び長刀を装備する事を推奨します』

「ああ、分かっている。さてこちらでは、これが初陣となる。派手にいこう。ウルフー、出る！ファンング…槍を放て」

『了解。自律誘導弾発射。突撃砲、長刀セット。自律誘導弾着弾まで…5…4…3…2…1、弾着！全弾目標に着弾。残敵、魔法使い1、従者1、悪魔2、鬼7です』

100体近くいた悪魔と鬼は、奇襲攻撃となる自律誘導弾によってほとんどを一瞬で還された。残った鬼達は戸惑い、魔法使いとその従者は狼狽えて右往左往している。

そこに向け、跳躍ユニットを噴射し匍匐飛行で一気に距離を詰める。そのまま、2体の悪魔に突撃砲で射撃をくわえこれを撃破。魔法使いと従者が、ギョツとした表情でこちらを見てくる

「日も暮れないうちから侵入とは、なかなか頭が回るみたいだな。ま、ここの魔法使い連中がバカなだけか」

「…貴様は誰だ？貴様のような奴の情報などなかったぞ」



どうやらこの侵入者は、事前にしつかりと調査をしていたようだ。最も雄介に言わせれば、攻める以上ある程度の情報収集や事前調査は当然の行為なのだが…

「どうやらアンタ頭は悪くないみたいだな。ま、ちよつとはいいいかな。この姿の時はウルフーと名乗ってる。俺は、ここの魔法生徒でもなんでもない。力はあるが、だからってここの馬鹿共に協力するつもりもないし積極的に関わろうとも思わない。だが、巻き込まれた以上…」

手に持つ突撃砲を魔法使いに向ける

「降りかかる火の粉は自分で払う。残念だが、今回はおかえり願おうか」

「チツ。確かにこれだけの損害を受けた以上は退くあるまい。だが覚えておけ。麻帆良の軟弱な魔法使いなど、いずれ倒され我らの前にひれ伏す事となる！忘れるな！」

そう宣言すると同時に残った鬼が襲いかかってくる。それに対して雄介は、慌てる事なく突撃砲で鬼を撃ち抜き長刀で頭から叩き斬り鬼と近接戦闘を繰り広げる。その間にも魔法使いの放つ魔法の射手を回避する。そうしているうちに侵入者の魔法使いと従者は転移で逃げた

「逃がしたのは正義バカが煩そうだが俺の知ったことじゃない…ふ

ん！」

最後の鬼に長刀を突き刺した。これで侵入者は撃退、悪魔と鬼を全て撃破し終え構えを解こうとし包囲されている事に気付く

「はあ…今日は厄日か。さてさて、喧嘩にならない程度に収められればいいんだが…」

こちらに向け歩いてくるタカミチを見ながら肩を竦める雄介だった

## 第1話 初戦（後書き）

どーだったでしょうか？やっぱりビクビクです。  
次は、ガンドル先生をはじめとした正義バカとの論戦です。それで  
は、また次回お会いしましょう。

第2話 VS正義バカ。雄介の本音（前書き）

な、なんとか書き上げた…。ちょっと当初の予定とは違う展開に…  
（汗）。先のストーリーいくらか修正しないと…。それでは、本編  
どうぞ！

## 第2話 VS正義バカ。雄介の本音

side タカミチ

いつもなら深夜に来る侵入者が、日も暮れきれない夕方にやって来た。たとエヴァに聞いた時、僕を含めた数人しか彼女からの報告を信じようとしなかった。結局、最後は学園長の指示で僕とエヴァ、ガンドルフィーニ先生それと瀬流彦先生で現場に向かっている。

「くっ！まさか、こんな時間に侵入してくるとは！」

「さすがにこんな事態は想定してませんでしたからね」

ガンドルフィーニ先生と瀬流彦先生が、走りながら話している。確かに僕を含めて、誰もこうなるとは思ってなかったのは事実だ。

「ふん、いつも相手がこちらの考え通りに動くと思わん事だ」

「なっ！」

「ガ、ガンドルフィーニ先生落ち着いて！今は争ってる場合じゃ…」  
「ふん」

はあ、エヴァとガンドルフィーニ先生の仲の悪さは冷戦と言ってもいいぐらいだ。おっと、ようやく結界内に潜り込めた。…なっ！

「なんて数の鬼と悪魔だ。…だが」

「！！待て、アレ以外にも魔力反応がある。かなりデカイぞ」

「本当かい？」

「これだけの反応をそう簡単に見落とすか。しかしこれは……………ジ  
ジイの孫以上だぞ」

そんな魔力量を持つ人間がいるなんてね。でも、これだけの魔力量  
を持つてる人物がいるなんて、学園長も知らないんじゃない？

「む、魔力反応が動いたぞ」

「一体何を…！？」

「ほう…見たことがない魔法だな。なかなか面白い奴らしいな。ク  
ツクツクツ…」

「あ、あれだけの鬼と悪魔が…なんて威力なんだ」

その後、木の陰から飛び出してきた影は、まるでアニメやゲームに  
出てくるようなロボットだった。でも…

「まさか…あの装甲も魔力で出来ているのか！？」

「信じられん。どれだけ密度が高いんだ…。人間なのか…？」

それもあるけど、彼の戦闘能力は凄まじいものがある…大戦の時の  
魔法使い以上じゃないか。もし、彼がこちらに協力してくれたら…

うん、かなり楽になるね。おっと…

「終わったみたいだね。ちょっと話をしに行こうか」

「話か。そう簡単にいくものか」

Side 雄介

雄介は、自分を半包囲するように近付いてくる4人を見て気付かないように小さく肩を竦めた

(やれやれ、タカミチにエヴァンジェリン、ガンドルに瀬流彦先生とはね。あとの二人なら見事に突破して見せるが…タカミチにエヴァか。戦ってる間に増援がやってきて…面倒くさい事は勘弁だな。どちらにせよ…ここらで、意識改革のための一石を投げ込んで見るかね)

「あゝ、面倒は嫌いなんだ。責任者を交えて話した方が楽でいい。案内頼めるか？」

その声をかけると、4人は驚いたような表情を浮かべている

「あ、ああ分かった。それじゃあ、学園長のところに案内するから着いてきてくれ」

「なっ！高畑先生、正気ですか！？こんな怪しい奴を学園長に会わせるなど！？」

「…おい、普通その本人を目の前にしてそういう事言うか？」（やつぱりコイツは頭が固いんだな。速瀬中尉が聞いたらぶちギれるぞ。あとは夕呼さんもか、この場合は）」

あまりのダメっぷりにあきれ果てる雄介

数十分後　学園長室

「（おーおーおー、警戒心剥き出しですかい。バカだねえ、余計な警戒は相手にも警戒心を抱かせるってのに…）ファング、バリアジャケット解除」

『了解、バリアジャケット解除します』

バリアジャケットを解除すると学園長、タカミチ、エヴァ、ガンドルフィーニ、瀬流彦及びその他の魔法教師、魔法生徒が一様に驚いた表情をしていた

「麻帆良男子中等部1-A、出席番号8番・工藤雄介です」

「う、うむ。麻帆良学園学園長の近衛近右衛門じゃ。工藤君は魔法使いなのかのお？」

「直球ですね。ふう、答えはイエスでありノーであるってところでね。世界というのは、次元の海に浮かぶ泡のようなものなんですよ。まあ、夕呼さんの考えは微妙に違いますかね。あなた達が言うところ



るの、偉大な魔法使いなんて馬鹿げた妄想はありませんでしたがね」

「なっ！マギステル・マギを愚弄するのか!？」

「また、面倒な…これだから独自の魔法技術を発展させた世界は…。  
説明かよ…はあ」

そう言うと顔に苦笑を浮かべる雄介

「フオツフオツフオツ、まるで異世界から来たような言い方じゃの  
お。説明してくれるかの？」

「いやまあ、いちいち細かく説明するのも面倒ですし…フアング、  
封時結界展開」

『了解、結界展開します』

学園長室を封時結界で包む。それに殺気立つ魔法使い達

「フアング、映像記録展開。これから、俺が体験してきたいくつか  
の世界の映像を見せますが…かなり衝撃的な映像と音声もあります。  
気を付けて下さい。…フアング」

『映像展開します』

これよりダイジェストでお送りします

オルタ世界では

『こ、こちらウルフ6!!た、隊長!戦車級が取りついて…誰か助

けてくれえ！」

「ウルフ6落ち着け！そんなに突撃砲を乱射されては近づけん！  
くっ！ウルフ3、ウルフ6の突撃砲を破壊しろ！！」

『了か…なっ！突撃きゅ…！！』

『ウルフ3！今藤中尉！！』

『ウルフ9！後ろだ！！避ける！！』

『だ、誰か早く戦車級を…ぎゃあああ！』

『くそっ！HQ！支援砲撃はまだか！』

あまりにも絶望的な戦力差を生き残り…

リリカルな世界では

「駄目なの！止められない！！」

「駄目じゃない！」

「一緒に帰るぞ、ヴィヴィオ！！」

「なのはママ…雄介パパ…。ママ達とパパと一緒にいたい…。助け  
て…」

「拘束は任せる。決めるよ、なのは！！」

「うん。ヴィヴィオ、ちょっとだけ痛い我慢出来る？」

新たな家族を得て

エスコン世界では

「サイファーとピクシーの邪魔はさせん！」

『ここから境目が見えるか？国境は俺達に何をくれた！！全てをや  
り直す。そのためのV2だ』

「ピクシー…」

『相棒、道は一つだ。信念に従い行動する。それだけだ。見届け役  
は…雄介、お前だ』

「…分かったよ。全てを見届けてやる」

『…ありがとうな。…時間だ』

発射されるV2

「退路を絶ったか」

『惜しかったなあ、相棒。歪んだパズルは、一度リセットするべきだ。このV2で、全てをゼロに戻し、次の世代に未来を託そう』

愚かな程に、真っ直ぐな二人のエースの悲しき決着を見届けた

『撃て、臆病者!!』 『くっ！ラリー!』

『撃て!!』

全てを語り終え、結界を解除する

「正義を語るなどは言わない。だがそれは、あなた達の考えだ。俺には俺の考えがある。あの経験した世界で、俺の考えは『絶対的な悪がないのと同じで、絶対的な正義もこの世に存在しない』だ。何故なら…正義も悪も人の数と同じ数あるからだ」

室内は重い空気に包まれている。エヴァやタカミチ、学園長も考え込んでいる

「本当に人員が足りない時は、連絡を下さい。手伝いくらいはしますよ。それでは…」

「待ちなさい。のお、工藤君…君はその力で何をするつもりじゃ？何を望んどる？」

学園長が、雄介の背中に問い掛ける

「…平和ですよ。争わないで済むなら…どんなに嬉しいか。いい加減…疲れました。争うのも…誰かの屍を踏み越え戦うのは…」

その戦いに疲れきった老兵のような、それでいて深く吸い込まれそうなたただただ純粹な目が、まっすぐに学園長を見つめる

「もうごめんだ。ただただ平和に暮らしたい。それだけです」

そう言うと学園長室を後にする雄介。後には、重苦し空気だけが残った

第2話 VS正義バカ。雄介の本音（後書き）

どうだったでしょうか？雄介の内面をうまく表現できてるでしょうか？不安です。次はエヴァと絡ませてみます。それでは、また次回お会いしましょう

### 第3話 雄介の矜持（前書き）

完成です！エヴァとの絡みが少ないですが、それは次回で…。それでは、本編をどうぞ！

### 第3話 雄介の矜持

あれから数日後

あれから表向きは、魔法教師などからの接触はない。しかし…

「チツ…またかよ。あれから毎日じゃねーか。こんなまわりくどいやり方されるんなら、普通に接触された方がマシだぜ」

チラリと虚空を睨むと再び歩き出す

休日だがやることもない雄介は、麻帆良の街をブラブラしていた

ふと新しいパソコンを買おうと思いつき、家電量販店にやって来た雄介。色々な機種を見てる最中、テレビのニュースに目をやる

『…連続殺人犯は警察の追跡を振り切り逃亡。麻帆良方面に向かって未だ逃亡中との事です。周辺住民の方は…』

「連続殺人犯…ね」

麻帆良という街はとにかく騒動を呼び込む。ここはそういう街なのだ

実を言えばあれ以来、雄介は戦闘行動をとっていない。あの日、学園長室で最後に語った「平和に暮らしたい」というのは、まぎれもない雄介の本音であった。雄介自身はあまり自覚していなかったが、長い間戦い続けてきた雄介の精神は、一般人であったならとくに精神崩壊を起こしていてもおかしくない程のストレスにさらされていた。だが、一般人ではなくBETAと戦う為に訓練により鍛えられ、前線で戦い続けてきた衛士としての強靱な精神はそれすらも許さなかった。その結果として、本人の自覚がないまま、ストレスは溜め込まれ続けた。そして、無意識のうちに戦闘行動を避けるようになっていった

だが、ここは麻帆良学園都市。表・裏の区別なく騒動には事欠かない。もちろん雄介に、それを予防し回避するという手段は行えない。つまり、それは雄介が常に騒動に巻き込まれる可能性が、非常に高い事を示していた

「…ファング」

「（解っています。麻帆良の全ての監視カメラのチェックをおこなっています。発見次第、警察に映像を送ります）」

「頼んだ…嫌な予感がするぜ、全く…」

新しいパソコンを購入し、寮の自室でセットアップを終えた時



『(マスター、例の連続殺人犯を発見。警察へ映像送信及びサーチャーでの追跡を開始します)』

「…やはり来たか。ちよつと様子見に出るか。嫌な予感の正体も分かるだろう」

寮を出ると、次々と警察車両がけたたましいサイレンを鳴らしながら走っていく

『(っ！！マスター！警察に追い詰められた連続殺人犯が…人質をとりました。人質の名前は…近衛木乃香。学園長のお孫さんです)』

「なんだと！？嫌な予感の正体はそれか…魔法使いは？」

『(動いていません。恐らく、野次馬が多いために動けないのかと思われま)』

「中途半端な秘匿を行うから、いざというときに動けなくなるんだ！…言っても始まらないか。ファング…奴が裁判を受けた場合…確定する刑は何だかわかるか？」

『(強盗殺人が4件、殺人が11件、殺人未遂が2件…この場合、99%の確率で死刑が確定します)』

それを聞き暫し考え込む雄介

「俺の仕事は裁く事じゃない…なら」

『狙撃最適地点は200m先の建物屋上です。突撃砲の射程内でマスターの技能なら可能です』

「…ああ、ありがとうな。ファング…行くぞ」

『了解』

バリアジャケット・不知火を纏い、ビルの屋上まで駆けあがる。そのまま伏射の姿勢になり突撃砲を向ける

『麻醉弾装填、観測開始します』

「俺は…」

僅かに動き続ける照準マーカー。その先の連続殺人犯を見据える

「俺は…護るべき者の為に武器を構える。…ピクシーに、説教されるかな…理想で戦うと死ぬぞってな。だが、それが…俺の守るべき矜持だ！」

『マスター！』

「ウルフ1、フォックス2！！」

一発の銃声が響き、連続殺人犯の首筋に麻醉弾が命中する。その瞬間、倒れこみ寝息をたて始める。抱え込まれていた人質の木乃香は、何が起きたのか分からずきよんとしている。そこに駆け寄り犯人を拘束し木乃香を保護する警官隊

「命中！さてと…急いで撤収、撤収つと」

『お見事です、マスター！』

「よせやい、相棒たるお前がいるから出来るのさ。これからも頼むぜ、相棒？」

『はい、マスター』

そそくさと帰っていると、前からエヴァンジェリンが歩いてきた

「クツクツクツ…なかなか甘い奴じゃないか。だが、しっかりとした矜持を持つてるようだな」

「そりやどうも…それで？その為だけに来たわけでもないでしょ？」

「ああ、そうだと…まずはジジイから孫を助けてくれてありがとう。謝礼を口座に振り込んどくそうだ」

「…まあ、断る理由がないな。あとは？」

「ふん、お前が気に入った。次の日曜に家に来るといい」

そう言い残すと去っていくエヴァンジェリン

「…なんか手土産持つてくべきだよな？」

『何かあるか検索しておきます』

「…頼む」

若干不安になりながら帰路に着く雄介。このお誘いがあんな事になるとは、雄介は全く予想していなかった

### 第3話 雄介の矜持（後書き）

次の話しはエヴァとのお茶会です。文才ないのにちゃんと書けるのが不安です。PVが1万超えた…驚いてコーヒーに塩を間違えて入れてしまった。なかなか美味しかったですけど…。次回もがんばります

第4話 エヴァとのお茶会。そして、バカは群れてやってくる(前書き)

お久しぶりです。就活に風邪、そして右足の肉離れに一月苦しめられてました。

完成したので更新します。…なんか妙な感じになってますが…本編どうぞ！

第4話 エヴァとお茶会。そして、バカは群れてやってくる

「…ログハウス？」

『そのようです』

雄介が連続殺人犯を狙撃してから一週間、雄介は約束通りエヴァンジェリン宅を訪ねていた

ドアをノックすると、エヴァがドアを開け現れた

「よく来たな」

「お招き頂きありがとうございます。あ、これお土産のシュークリーム」

「ほお、気が利くじゃないか。頂こう」

家の中に入ると、雄介が紅茶の準備を始めた。その手際の良さにエヴァが感嘆の声をあげる

「ほお、なかなかいい腕前じゃないか」

「あはは、二回目の転生の時の同僚に喫茶店の娘さんがいてね。教えてもらったんだよ」

「なるほど。それならば納得できる」

紅茶を淹れ、シュークリームを取り分けるとお茶会が始まった

「へえ、やっぱりバカなんだ、ここの魔法使い連中って」

「バカでもあるが、ほとんど頭の固い奴だからな。まともなのは数人といったところか」

「ってことは、俺との相性は最悪かなあ」

「考え方が違いすぎるからな。あわないのは当然といえば当然だ。

連中は、力は全て人々を助けるためにあると思ってるからな」

「…間違ってるとは言わないが、何かずれてるだろ」

「クツクツクツ、奴らに言っても無駄だ」

「ケケケツ。ナカナカイウヨウジャネーカ、ゴシユジン。マア、ソ  
ンナレンチュウニ、フリマワサレテルヨウジャ、闇ノ福音ノ名ガナ  
クゼ」

「ん？」

二人しかいない部屋に、もう一人の声が響く。見回すと一体の人形に目がいく

「えつと…ユニゾンデバイス…か？」

「いえ、違います。恐らく人格を持った人形かと」

「それはまた…ほえ、こっちの魔法もなかなか…」

「ケケケツ、ゴシユジンカラキイテルゼ。才前、ナカナカイイ性格  
シテルンダツテナ」

「…まあいいけど」

どう対応するべきか悩む雄介。そこにエヴァの質問が飛ぶ

「そういえば…貴様は、前の世界では戦い続けていたと言っていたな」

「…？ええ、幾らか前線から離れた事もありますが…ほとんど前線の部隊とかにいましたね。それが？」

「ならば二つ名などもあるのではないか？」

「二つ名…？あ、ありましたね。牙狼っていうのが。その牙狼の前に『富士の』とか『円卓の』ってついたのもあったな。あとは…

『最後の狼』ですね」

「『最後の狼』？まるで、天然記念物だな」

「天然記念物…かあ。だったら良かったんですけどねえ」

泣きそうな表情をしながら、口元に自嘲の笑みが浮かぶ

「最初の転生先の世界で率いていた中隊、帝国軍第184戦術機甲中隊、コールサイン『ウルフズ』。激戦の九州、四国、地獄の京都撤退戦、佐渡島撤退支援、関東防衛戦…そして、明星作戦。関東防衛戦までは、まだ良かった。だが…明星作戦、甲22号・横浜ハイヴ攻略戦で俺の率いていたウルフズは俺一人を残して壊滅。11名いた部下のうち、BETAとの戦闘で戦死したのは5名。残りは…残り6名は、友軍であるはずの米軍が独断で放った2発のG弾の爆発で…。最前線から撤退中だった俺達はもろに影響を受けた。先頭だった俺の撃震は、機体の左側を削り取られた。そして、残りの部下達は…G弾の黒い閃光の中に消えていった…。友軍のはずの米軍が！こちらに通告せずに！独断で放った2発のG弾の爆発に巻き込まれて！」



拳をテーブルに叩きつける。高ぶった精神を落ち着ける為に、カッブに残っていた紅茶を飲み干す

「…あれだけの戦争だ、同期の奴、部下、上官そして、民間人。それらの区別なく死んでいく。それはいいさ。民間人を守りきれなかったのは、悔しいが…それが戦争だ。諦めもつくし自分が、戦闘で死ぬ覚悟もあるさ」

じっとこちらを見てくるエヴァ

「上の連中からすれば、俺達兵隊なんて、書類上の数字で増えた減ったに一喜一憂するただの駒さ。だが、俺達兵隊は戦って敵を殺して、自分を守り仲間を守り、後方の味方を守り民間人を守り、国を、地球を守る。それは押し付けられた義務であり、同時に俺達兵士のほとんどが自らに課した最優先の任務だ。だが、前線と違って後方でふんぞり返ってる馬鹿共は、自分達の利権を最優先に考える。それを悪いとは言わない。だが、奴らは、その醜い利権争いとそれに絡む思惑を前線の兵士にまで押し付けようとしやがる。その結果が明星作戦でのあの2発のG弾だった。奴らが正義、正義と言い続けるせいで、俺達は自分達の正義を信じられなくなった…」

そっぴい頂垂れる雄介。ファングが気遣うように明滅する

「はあ…話が逸れたな。で、明星作戦は形はどうあれ成功した。が、作戦成功を発表しようにも上層部は、納得してない連中から盛大に突き上げを食らった。で、白羽の矢が俺にたった」  
「…プロパガンダか」

雄介の言いたいことに気付き、顔をしかめるエヴァ

「そう、士気向上をはかるため有名になりつつあった、ウルフ隊最後の生き残りの俺を英雄にしたてあげた」

新しく紅茶を淹れ、ゆっくりと飲む

「そこでつけられた二つ名が『最後の狼』。まあ、そのせいで簡単に死ねなくなっただが…。っと、話が逸れまくったな。最初の話に戻るが、ここの魔法使い連中は、あのと時の上層部の匂いがしやがる」  
「あいつらは、『自分達の信じる正義』のためならなんでもするぞ」  
「嫌なこと言わないで…すんごいリアル想像できるから」

エヴァの発言にげんなりする雄介。しかし…嫌な事ほどよく起きる

「警告、十数名の魔法使いが接近中。恐らく、頭に脳みその代わりにお花畑が詰まっている連中でしょう」

ファングの報告に、二人の目付きが鋭くなる

「チツ… 奴ら自分の言うことを聞きそうにない貴様を、私もろとも消すつもりだろう」

窓の外を見ると魔法教師と魔法生徒が近付いてくるのが見えた

「あの野郎共… 今の俺は虫の居所が悪いんだ…。無事で済むと思うなよ…！」

この瞬間、襲撃者達の運命は決まった

第4話 エヴァとのお茶会。そして、バカは群れてやってくる（後書き）

どうだったでしょうか。楽しんでいただけたら幸いです。書いてるうちに自分で「アレレ？」となってしまうました。

次は馬鹿共の殲滅と学園の警備網の見直しに雄介が着手します。

次をお待ちください。

第5話 殲滅！正義バカ。 & 麻帆良学園の警備を強化せよ！（準備編）（前書

完成しました！（遅すぎた…）。なんかろくすっぽも戦闘描写が入ってない…。どーしよ…。では、どうぞ！

第5話 殲滅！正義バカ。 & 麻帆良学園の警備を強化せよ！（準備編）

窓から近付いてくる馬鹿共を見て、舌打ちをする雄介

「面倒な奴らだな。こちらら虫の居所がすこぶる悪いんだ…無事に済むと思うなよ」

そういうと、バリアジャケット『不知火』を展開。構成しているのが、魔力故に兵装担架の数を5つに増やした。そのため、左右の手と4つの兵装担架に突撃砲を装備、残りの兵装担架に長刀という装備になっている

45

「さてと…エヴァ？」

「うむ…ウルフ1、出撃を許可する」

「了解。ウルフ1、工藤雄介…出撃する」

ノリの良いエヴァにそう言つと、ドアから勢いよく飛び出し跳躍ユニットを全力で噴かす

『前方より魔法の矢、67発接近』

「ウルフ1、FOX2！」

宣言するとともに、両手及び兵装担架の突撃砲6門が盛大に魔力弾を発射する

『全弾撃墜確認。敵部隊、第二次攻撃の準備に入った模様』  
「やってやるうじやないか…」

凜猛な笑みを浮かべ、突撃砲を向けつつ突撃する

同刻 学園長室

部屋の主、学園長は机で書類を仕上げていた

「ふう、ようやく一息つけそうじゃな」

書類整理も終わり、ゆっくりとお茶を啜る学園長。平穏な時間。しかし…

バタン！！

「学園長！大変です！」  
「ふおっ！く、葛葉君…な、何事じゃ？」

「十名前後の魔法先生と魔法生徒が、エヴァンジェリンへの強襲を行うために向かいました!!」

「なっ、なんじゃとー!?!」

刀子からの報告に驚愕する学園長

「きよ、今日は確か、工藤君がエヴァンジェリンの家を訪れている筈…い、イカン!すぐに、高畑君とともに向かうのじゃ!」

「はいっ!」

刀子は、入ってきた時以上のスピードで飛び出していく

「間に合ってほしいのお…」

刀子とタカミチが現場に到着すると、激しい銃声と爆発音、そして、怒号と悲鳴が木霊していた

ここで、雄介のバリアジャケットについて説明。雄介のバリアジャケットは元々、オルタ世界からリリなの世界に転生した際に、バリアジャケットのデザインを考えるのが面倒だと感じた雄介が、馴染み深かった戦術機『撃震』と『不知火』を思い浮かべた事から、この人間戦術機となった。もともと、クロノやリーゼ姉妹などからはアーマージャケットやTSFジャケットなどと呼ばれていた。

また、これらを構築する際に突撃砲から放つ魔力弾のサイズを3分



の1に設定し、36ミリは12・7ミリ、120ミリを40ミリに設定した。もつともこれは反動のほとんどない魔法ゆえに出来ることで、通常の銃器でこのサイズの弾丸を6丁も同時に使い生身の体で連射した場合、まず間違いなく体を壊す。閑話休題

タカミチや刀子のしている先では、襲撃したと思われる魔法先生と魔法生徒が死屍累々と倒れており、その周りに不知火が『12機』展開していた

「ん？おや、高畑先生に刀子先生ですか。随分とはやく到着したようで…ああ、それと彼らを殺してないのでその点はお安心を。もつとも、トラウマについては知ったこっちゃないですがね」

「く、工藤君…その周りのは…」

タカミチが驚きながら問うと、一機だけ反応した本物の雄介はすぐそばの一機に向けて突撃砲を発砲した。すると、銃撃を受けた不知火がふつと消えると他の不知火も次々に消えていった

「フェイクシルエツト。まあ、見ての通りの幻影ですよ。忍者の分身みたいに攪乱に使ったりしますよ」

「幻影…」

その光景に呆然とする刀子。タカミチも困惑気味だ

「っ！かですね…こいつらの戦い方の下手さ加減は、一体全体どういう事ですか？魔力量が多くないから一発の威力が落ちるのは判りますが…ろくすっぽ連携はとれない、目の前に現れたものだけに集中して周りの状況を見ない、拳げ句の果てには、手柄を焦って無駄な魔法を連発…。これでよく生き残れたな、こいつら…下手すりゃ訓練校出たばかりの陸戦魔導師にすら負けるんじゃないか？」

自分の足元で倒れている魔法使いに、呆れを含んだ視線を向ける雄介

「…まあ、こんなでも生き残れたんだから相手も大概なんだろうな。でも、侵入者感知はエヴァに頼りつきりみたいだし…む」

30分後 学園長室

「君は限度を知らないのかねっ！！」

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてますよ、ガン…ガンドルフィン先生」

「ガンドルフィーニだ！」

（いや、この人からかうとおもしれ。いまなら、速瀬中尉をからかう美冴さんの気持ちがよくわかる）

「しかし、困ったのお。警備の人員がかなり減ってしもうた」

「…そもそもがあんなザル警備なんだから…いや、さらに穴が開いたか」

「ひどいのう」

学園長と話しながら麻帆良周辺の地図を見つつ考え込む雄介

「…やっぱセンサー類を外周と…ここら辺に設置すればある程度は…。あとは…AWACSを飛ばせば充分だな」

その夜、工学部の廃材置き場を強襲し、資材や基盤を拾い集め小型版のAWACSを一日で完成させる雄介。もつとも、プログラムのバグつぶしや調整に2〜3日かかったが…

#### 学園長室

「それで、これからどうするのか?」

「まあ、警戒網は張ったし作戦行動中の指示とかは空中管制機に任せて…あとは戦力をどうにかすればいいんじゃないですか?」

「戦力のお…」

「それくらいは、しっかりしてほしいんですがね。まあ、こっちでもいくらか用意しますけど…戦術機とか」

「ふお!？」

「いや、人間サイズですよ。原寸で作ったら、流れ弾の120ミリや多目的自律誘導弾やらであつと言う間に街なんか廃虚に早変わりですよ。凄乃皇なんか使った日には…」

雄介の発言に冷や汗をダラダラ流す学園長であった

「とりあえず、資材やなんか揃えば、戦術機甲部隊の一個や二個連隊なんてあつと言つ間に揃えてみせますよ」

「そ、それは頼もしいのお（わし…大間違いをしたかのお）」

この日より雄介による、『麻帆良学園防衛戦力強化計画』が始動した

第5話 殲滅！正義バカ。 & 麻帆良学園の警備を強化せよ！（準備編）（後書

…次は強化計画が本格始動と大停電をお届けします。ただ、AWA  
CSの人格が「イーグルアイ」の予定なのでどうなるか…。次もが  
んばります！

## 第6話

麻帆良学園の警備を強化せよ！（配備編）&初めての大停電戦闘（前

大変長らくお待たせしました。：長かった、そのくせ内容がかなり  
うすい…。どうせ文才なんかないですよー（えぐえぐ）

それでは、本編どうぞ

第6話 麻帆良学園の警備を強化せよ！（配備編）&初めての大停電戦闘

麻帆良学園 地下工廠

ここは、雄介が学園長に許可を得て建造した地下工廠で、ここで麻帆良防衛の為の戦力を大量生産する予定である。とはいえ、まだ稼働して間もないため、ようやく製造を開始したところである

「さてさて、戦術機を造るとして…機種はどうするかね」

パソコンの画面に表示される設計図を見つめる

「ふむ…全体としてハイレベルでまとまってる不知火に、防御線構築の為の撃震、近接戦闘の為の武御雷…あたりかな」

三機の設計図を表示し、他の機体の設計図を一旦閉じる。そして、機体カラーを決めるためいくつかの画像フォルダを開いた時、作業する雄介の手が止まる

そこにうつるのは、振り上げた長刀を今にも振り下ろさんとする一機の不知火。その機体には烈士のマーキングがされている

「沙霧…何を考えてあんな帝国を巻きこんだ壮大な自殺劇なんぞしでかしたんだよ。たしかに、お前の行動で帝国の膿を出し尽くせたさ…だが、代償がデカすぎるだろうが…お前達がいれば佐渡島はもつと楽に…」

いくらか交流のあった、帝都守備連隊の沙霧尚哉を思い出し寂しそうな顔をする雄介

「ウルフズの皆が明星で逝って、あげく真冬のどんちゃん騒ぎでお前が逝って…あの世界じゃ、死ななくてもいい奴らが次から次へと死んでいく、まったく…。…そういえば、沙霧とPJってどことなく似てたな。理想を語りながらもどこかちぐはぐだからか」

そうつぶやくと同じ不知火でも、国連軍カラーの不知火を表示する

「しばらくは…こっちな」

そうつぶやくと作業を再開する雄介

二週間後

地下工廠



「…調子のりすぎた。二週間で戦術機甲二個連隊はやりすぎか…。いやでも、『毒食らわば皿まで、皿を食らわばテールをかじり倒し、最後は食堂を爆破せよ!』って言うし…」(まかり間違ってもそんなぶっ飛んだ格言は世の中にはないby作者)

地下工廠にある目の前の格納庫には、216機の戦術機が並んでいる。大半は撃震だが、中には国連カラーの不知火が13機、武御雷の紫が1機、赤が3機、青が1機、白が3機、山吹が1機、黒が4機いる

「でもまあ、戦力はないよりはある方がましかな」

同日 深夜

警備のために、出ている魔法使い達に持たせた小型無線機が鳴る

『こちら空中管制機、『イーグルアイ』。全員出たようだ。残るは戦術機甲部隊のみだ。しばらく待機せよ』『こちら第1戦術機甲連隊、これより出撃する』

『こちら第2戦術機甲連隊、同じくこちらも出撃する!』

その通信を聞き顔をしかめる魔法先生達。いまだに、雄介の提供す

る戦力を信じていない者達が多い。もつとも、雄介に言わせれば『コンバットプルーフしてない兵器なんて、いつもそういう扱いになるから仕方ない』とのこと

地下格納庫から出撃した人間サイズ戦術機達は、巡回を始めた魔法使い達と合流し、その周囲を警戒したりそのまま頭上をフライパスし巡回に向かう部隊に分かれる

『こちら第214戦術機甲中隊、侵入者を発見。エンゲージ!』

『こちら第113戦術機甲中隊、エネミーインレンジ!エンゲージオフエンシブ!』

『第128戦術機甲中隊よりHQ、侵入者を確認。これより交戦する』

各所で連続した銃声が鳴り響き、夜闇に曳光弾がきらめく

「ウルフ1より各隊状況知らせ」

その雄介の問いに、各部隊から異常なしとの通信が届く

「これなら大停電の時も大丈夫そうだな」

目の前に現れた鬼に銃撃を加えつつ呟く

それから一週間

今日は大停電の日。生徒や一般人が、屋外にいないことをしっかりと確認する学園長をはじめとする司令部のスタッフ達

「…時間じゃ」

「わかりました。HQより各員へ、防衛戦開始。繰り返します、防衛戦開始」

『第一戦術機甲連隊、全機出撃！！』

『第二戦術機甲連隊、第一に遅れるなよ！』

『行くぞつ、ヴァルキリーズ！！全機、続けッ！！』

『了解ッ！』

地下格納庫から次々と出撃する戦術機甲部隊。その中には、紫を先頭とした部隊の姿もあった

『こちら空中管制機『イーグルアイ』。敵集団多数が最終警戒ラインを突破。敵集団第一波をアルファ1からアルファ122と呼称。』

第二波をブラボー1からブラボー149と呼称する。なお、作戦エリア中央の世界樹広場に補給拠点を設置した。有効に活用してくれ』

『紅蓮、真耶さん、行きましょう』

『ハッ！』x2

『月詠、鶴翼複五型にて前進する』

『はっ！クレスト2より第16斯衛大隊各機に告ぐ！鶴翼複五型に

フォーメーションウィングダブルファイブ

て前進せよ！』

『うむ。皆の者…続けいつ…!』

一週間の間に増産しまくった武御雷及び瑞鶴による一個連隊が不知火以上の機動性で各戦線を移動し、その運動性を発揮し近接戦闘で次々と学園に侵入してくる鬼や妖怪を撃破していく

『ぬんツ!!ふん!!おおおお!!』

『紅蓮にかかれればこの数すら相手になりませんか。さすがです、紅蓮』

『はっはっはっ!BETAより齒ごたえがありませんゆえ』

『さすが紅蓮大将だ。我々も続くぞ!』

『おおおおっ!』x多数

この日の大停電で、麻帆良の魔法使い達は、戦術機甲部隊の戦力を認めることになった。もつとも、未だに認めようとしなない者たちもいたが…

正史から外れた外史とも言つべきこの世界で、誰にも予想できない物語が始まる

## 第6話

麻帆良学園の警備を強化せよ！（配備編）&初めての大停電戦闘（後

どうだったでしょうか。かなり変な内容になってしまいました。次は…ちょっとオリジナルな麻帆良の地下は実は…について書こうかと思えます。外史というのはこれが理由になるんです。それでは、また次回

第7話 麻帆良の地下に悪夢へ闇は眠る(前書き)

やったー。なんとか月をまたがずに更新できたー。

本編どうぞ

## 第7話 麻帆良の地下に悪夢へ墮は眠る

麻帆良学園 学園長室

先日の大停電防衛戦における、戦闘報告をする雄介

「…以上のように戦闘による損失は0、被害は小破7のみ。まあ、これにしたって装甲板の矯正か取り替えですみますから実質的な損害は無し。防衛戦における戦術機甲部隊の戦果も上々…こんなところですかね」

「フオツフオツフオツ、これで少しは楽になるかのお」

「さてね…下手すると戦争かもな」

そついうと互いに苦笑いを浮かべる

しかし、次の瞬間雄介の纏う空気が変わる

「…ここからは麻帆良…いや、帝国陸軍184戦術機甲中隊隊長として話そう」

「…言ってみなさい」

「…薄々あんたも気付いて、いや、気づかないフリをしている事についてだ」

その一言に、いつもは穏やかな学園長の目付きが鋭くなる

「地下の更に地下…じゃな？」

「そうだ…地下工廠を建造する際に、地下の岩盤やらなんやらの厚さとかを調べた際、建造予定ポイントのその下に…異様に広い空間を発見した」

「ふむ」

「空洞発見当初は、遺跡かなにかだと思ったわけだ。世界樹の例もあるからな。だから、一応の調査の為にセンサーやサーチャーを使って探ってみた。調査前は、魔法関連の地下遺跡かちよつとした水脈かと思っただが…」

深刻そうな表情で資料を渡す雄介。受け取った学園長はそれに目を通し…驚愕に目を見開いた

「これは…本当の事なんじゃな…？」

「冗談…ですめばこんなに悩まないですむんだがな。…途中までしか調べてないが、少なくとも…フェイズ3前後の規模だ。攻め落とすにも戦術機甲一個旅団…324機程度じゃはつきり言って間引き作戦すら危うい。…馬鹿な魔法先生たちじゃ、よくて最初の広間を越えられたらいい方だろうな…」

自分が提出した書類に目をやり、深々とため息をつく。学園長も唸っている



「向こうならH27・甲27号になるんだろうが…カシユガル以降のがあるとも限らないしな…暫定でH1・甲1号・麻帆良オリジナルハイヴとだけ命名しておくか」

学園長に渡した資料には、かつて体験した世界で散々な目にあわされたハイヴの地下構造のマップが調査した途中まで描かれていた

その日の夜

世界樹広場に集まる魔法使い達と雄介と学園長

「どういう事ですか！学園長！！」

「我々に地下深部の調査をするなというんですか！」

「いや、しかしのお…こればかりは…」

学園長から地下（ハイヴ部分）の調査に関しては、すべて雄介に一人任すと言われ激昂する雄介に反感を持つ魔法先生及び魔法生徒達。世界樹広場は喧騒に包まれた

「…ピークパーク喧しいんだよ、ド三流どもがッ！」

「フオッ!？」

雄介の発言に驚く学園長。広場に集まっている魔法先生と魔法生徒

達を睨み付ける雄介

「お前たち程度じゃ、ハイヴに潜ったって一時間ももたずに全滅するのがオチだろうよ」

「なっ！我々とて…！」

「一回の接触で数百から数千、下手すれば数万もの敵と交戦するんだぞ？それを突破またはやり過ぎしながら進んで大深度最奥にある反応炉を制圧確保もしくは破壊する。それが達成出来なければハイヴ攻略戦の意味がないからな。そんな場所に、自分達の領土すらまともに守れないお前たちが突入して生きて還ってこれるのか？奴らは一団一体はさほどでもないが、奴らの最大の武器はその物量だ。そんな奴らを相手にして、お前たちはまともに戦えるのか？奴ら相手に中途半端な腕前じゃなんの役にもたたないぞ」

「だが、上級魔法や広域殲滅魔法ならば…！」

「最大深度がフェイズ3で平均700m。それ以上のフェイズなら1kmを超えるんだぞ？そんな中を魔力を馬鹿みたいに消費する上級魔法を連発してみる、あつという間に魔力が底ついて何も出来なくなるだけだぞ」

ハイヴの予想外の大きさに、驚きざわめく魔法使い達

「それに…兵士級ソルジャーや闘士級ウォーリアー、あとは戦車級タンクならいざ知らず、突撃級デストロイヤーに要撃級グラップラー果ては要塞級フォートに小技が効くとも思えないし。それに…だ、ハイヴ内部ならいざ知らず、ハイヴ外なら光線級レーザーと重光線級レーザーついでう百発百中な凶悪すぎるBETAのせいで、空に上がれないんだからな」

「待て！一体そのBETAとはなんだ！？」

雄介の話の中に出てきた、聞きなれない単語に質問する一人の魔法先生

「BETAっていうのはだ、Beings of the Extraterrestrial origin which is Adversary of human race. の略で人類に敵対的な異星起源種の事だ。頭文字をとって通称BETA」

「異星起源種！？エイリアンとも言うのか！！」

「エイリアン：ねえ。まあ、似たようなものだな。俺達と同じ炭素生命体だが、奴らからすればアレは有機作業ユニット：つまりは土木作業用のロボットつわけだ。だから、奴らの行動は意思ではなくプログラムされた行動ゆえに単調なんだ。ま、数が馬鹿みたいにいるから行動が単調でもつらいが：。さらにもうひとつ、奴らの上位存在：一種の指揮官だな、そいつによれば俺達人間は生命体ではなく自分達の資源採掘を邪魔する災害らしい。これは前の世界で死ぬ前に聞いた事だがな」

「な、なんなのだ：そのデタラメな存在は！？」

「まあ、デタラメだというのは頷ける。なんせ、60億いた人類がただだか30年足らずで10億程度にまで減らされたからな。さらに、指揮官である上位存在とその司令部ともいえるオリジナルハイヴが、この宇宙には10の37乗もあるんだとよ」

「じゅ、10の37乗！？」

「馬鹿馬鹿しい！そのような荒唐無稽な話が：」

「だが、実際地下には謎の空洞が：」

「だからといって、この話が事実だとは断定する要素が：」

「いや、そもそも一生徒の話など：」

「だいたい信じるにたる確たる証拠が：」

ざわめき議論する魔法先生達。はっきり言って、雄介の話を通じている者はほとんどいない。その為、雄介の話に嘘だと結論づけようとした時、突如雄介の通信機が鳴る

「こちらウルフ1、HQなにがあった…。…なっ！ポイントS-41とNE-33に門だゲートと！？クソッ！それぞれに二個大隊ずつまわせッ！！大至急だ！今から俺も…NE-33の方に向かう！…ああ、全部隊に防衛基準態勢2を発令だ。これから確認終了まで24時間態勢で警戒にあたる…。以上、通信終わり」

通信を切ると、バリアジャケット「不知火」を展開する雄介

「学園長、見つかったぜ。ハイヴへの入り口がな」

「なんじゃとっ！？」

「あの山の中にある洞穴のうちの二ヶ所が、地上とハイヴをつなぐゲートだった訳だ」

「まさか…」

「さてと…オイ、脳足りんの魔法使いども。お前らがまともに戦えると思うなら…勝手についてきな。それは、あんたらの判断だ」

そういうと、雄介はNE-33に向かった。それを追う魔法先生と魔法生徒達。学園長の制止すら無視している

「…馬鹿どもが。連中はやはり脳足りんか…。どれだけの人数が…」

- ハイヴ（地獄）から戻ってこれるかな？ -

無知な魔法使い達は、自ら進んで地獄に足を踏み入れる…

闇の気配に誘われ、最後の狼は長き眠りから今、目覚める

第7話 麻帆良の地下に悪夢へ闇は眠る(後書き)

いかがでしょうか。とりあえず、次はハイヴへの強行偵察です。魔法使いの扱いが、かなりひどくなります。

それでは…また、次回

さよなら、さよなら、さよなら…

第8話 麻帆良ハイヴ強行偵察（前書き）

…えーと、お久しぶりです。ようやく就職したのですが…そのせいで執筆時間が…。

とりあえず、本編どうぞ

## 第8話 麻帆良ハイヴ強行偵察

麻帆良学園 山中 ポイントNE - 33

『補給コンテナまだか!』

『たった今到着!』

『サーチライトはこれだけか!? バッテリーはどうだ!』

『217中隊警戒態勢に移行。センサーからの情報を見落とすなよ!』

『ウルフーがまもなく到着する。馬鹿な魔法使い達も来るぞ!』

『冗談じゃねえ!! あんなのが来たら邪魔でしかない! 追い返せ!』

『くそっ! 機甲部隊がない分、火力が足りん! 補給コンテナはこれだけか!』

『そもそも、戦術機甲部隊の数が圧倒的に足りないんだ!』

『偵察に潜るとしても、地表での陽動がなければどうにもならん!』

『陽動だあ!? はん! 下手に陽動すりゃ、この街が京都や横浜みたいになるだけだ!』

発見された門の周囲を、慌ただしく動きまわる戦術機甲部隊。そこに急行してきた雄介が合流する。それに近づくヴァルキリー01（伊隅みちるAI搭載）の不知火

『お疲れ様です』

『状況は?』



『部隊の配置はこちらも向こうも完了しました。ただ…』

「戦力…か。しかたあるまい。戦術機甲部隊とて稼働しはじめて間もない。いずれは…十個師団くらいは編成したいがな。一個大隊とヴアルキリーズは俺に続き突入する。残りはこの場にて警戒。あの馬鹿どもは…勝手にするだろう」

『こういつてはなんです…連中は模擬戦の延長みたいな戦いしかしていません。大停電の時だって、予定調和みたいな…年間行事みたいな戦いでしかないですし…アレでは』

「言いたい事は解るさ。だが、だからこそなんだ」

『だからこそ…ですか？それは…』

雄介は武装の確認をしつつ頷く

「やつらは…模擬戦やゲームみたいな戦いしか知らない。だから、奴らには覚悟がない。なら…本当の戦いで奴らに覚悟を叩き込む。

それしか、意識改革できそうにない」

『しかし…それでは、無駄に死者や負傷者が増えますが…』

「…あの世界、ことBETAとの戦いは死ぬか生きるかだったろうが。今から俺達はハイヴに強行偵察を仕掛けるんだぞ？」

『そう…ですね』

「なあに、最下層まで潜るってわけじゃないんだ。ヴォールクよりはマシさ」

そついうと、門の前に行き一度周囲を見渡す

「これより、ハイヴに突入しハイヴ内部の強行偵察を行う。目標は、

中層の広間までの詳細確認及びマップ作成。可能ならば、下層への偵察を行う。ただし、作戦遂行が不可能と判断した場合、初期の作戦目標を達成していなくても全軍直ちに撤退。無理に潜る必要もないからな」

『遂行不可能…となるとアクシデントが?』

「ここはハイヴ。何がいつ起きても不思議じゃない。そうだろ?」

『…まあ、佐渡島の時も散々だったしね』

「そういうことだ。…さて、魔法使いの方たちは、どうぞご自由に独自の判断で行動してもらって結構だ」

「…どういづつもりだ」

「別に。BETAの情報は、さっき渡したんだ。対処くらいできるだろう?」

雄介のその発言に、憤る魔法先生達。そして、彼らは愚拳に走った

「あ!おい!!」

洞穴の中にある門から、雄介と一個戦術機甲大隊及びヴァルキリーズが突入しようとした瞬間、飛行魔法が使える魔法先生達がハイヴに飛び込んでいったのだ

「本当に好き勝手に飛び込むとは…っと、こっしちやいられん。全機突入!」

『ったく!アイツら、自殺志願者か!突入だ!突入!』

『ろくに実戦経験もないくせに!』

主脚走行でハイヴに突入し、主脚走行と噴射滑走及び噴射跳躍を使い分けながら先行する魔法先生達を追う雄介達。しかし、ハイヴ内で警戒しながらの進行あるため速度が出ない

「ん？全機止まれ！！」

「一つ目の広間ですね。かなり浅い場所ですが…」

「あ！これは…」

「BETAの体液…いや、血痕か？奥に続いているな」

「まさか、あいつらは…魔法の矢を1〜2発撃ち込んで、そのまま撃破確認せずに潜ったの!？」

「くそっ！急ぐぞ！」

血痕を辿りながら、移動しているBETAを次々と後ろから攻撃する突入部隊

「なんか要撃級や突撃級が3Mくらいになってねーか!？」

「要塞級も6Mくらいですしね！うりゃああああ！！」

「速瀬中尉は、相手が小さくても戦いで性的興奮を感じるのと同じみたいですね」

「む〜な〜か〜た〜…」

「って、築地少尉が言っていましたよ」

「わわわ、わだすそんなこと一言も言っただけさ!？」

「築地イ！。アンタいい度胸してるじゃない〜…」

「ひ、ひゃあああ！は、速瀬中尉あ、あぶねーべさ!？あ、茜ちゃんだ、たすけてー!」

「もっ、美冴さんたら…」

宗像美冴AI搭載の不知火と、速瀬水月AI搭載の不知火のじゃれあいと、それに巻き込まれる築地多恵AI搭載の不知火のあたふたぶりを楽しげに横目で見ながら突撃砲でBETAを撃破する雄介

『一集団の数は少ないですが…』

『集団数が多い…！』

『少佐！前方300に要塞級7！』

『くっ！全機呐喊！要塞級の壁を切り崩す！40ミリ斉射三連！』

40ミリ粘着榴弾の集中射で開いた要塞級の隊列を、強行突破する突入部隊

『白銀え！要塞級狩りだ！斬り込めえ！』

『了解！うおお！』

よってくる戦車級を撃破しながら、一機の不知火（白銀武AI搭載）に要塞級の陽動・撃破を指示する

「3…2…1…要塞級突破！噴射滑走及び噴射跳躍で一気に行くぞ！」

『前方に戦闘反応ッ！』

『ヴァルキリー1よりヴァルキリーズ！喰い放題だッ！一匹残らずたいらげる！』

「全機呐喊！もはや、作戦遂行は不可能と判断！作戦プランを破棄、魔法使いを救出・回収後撤退する！」  
『了解ッ！！』

広間に飛び込み、魔法使い達の周囲の敵を撃破していく

「撤退だ！さがるんだ！！」

「撤退だと！？」

「ふざけるなッ！我々、正義の魔法使いが負ける訳が…」

「バカッ！六時警戒！避ける！！」

一人の魔法先生に兵士級が飛びかかる。慌てて振り返る魔法先生

「バカッ！避ける！」

怒鳴りながら、飛びかかってきた戦車級を撃破しながら突撃砲を向ける

「チイツ！バカと射線がかぶる…！風間！柏木！」

『くっ！こっちは無理です！柏木少尉？』

『突撃級の死骸で射線が…くっ！』

雄介の位置からでは救助対象と、突撃砲の射線がかぶり撃てず。風間禱子AI搭載不知火は小型種との乱戦で支援出来ず。柏木晴子A

I搭載不知火の位置からは突撃級の死骸が射線を塞ぐ。そして―

「ぎゃああああ！」

「ちい！時間もなし…か。全機！S―11複数起爆で切り抜けるぞ！  
！タイマー30！」

『了解！』

数機がS―11を起動させる

そのまま、近くの魔法先生を掴むと一斉に撤退を開始する。撤退しながらS―11を設置すると全力で撤退する。しばらくすると、後方で複数のS―11が盛大にBETAを吹き飛ばし通路を塞ぐ

77

「止血は？」

『なんとか…ですね。疑似生体がないので左腕は諦めてもらっしか…』

「まあ、犠牲が一人の魔法先生の左腕一本ですんだ。4〜5人は喰われると思ってたが…まあまあか」

そう呟く雄介に憎悪の視線を向ける魔法先生達。それに気付いた雄介だが…

（はん、やるうってのか？ま、そんな気概があるとも思えんがな…）

ハイヴから撤退した部隊は、補給と整備を受ける。左腕を兵士級に食いち切られた魔法先生はすぐさま、治療魔法をかけられその後本国へ戻った

#### ハイヴ突入部隊被害報告

戦術機7機（撃震4機、陽炎3機）が腕部を損失。魔法先生一名が負傷（左腕損失）

魔法先生達は、BETAの恐ろしさを知ったが未だ意識改革は出来ず。

麻帆良の地下の間は、未だ本格的な行動を起こしていない。だが、外史の歯車は着実に動き始めた

## 第8話 麻帆良ハイヴ強行偵察（後書き）

…批判がすごそうだな。とりあえず、次はキンクリして原作開始します。このままだと長々と無意味な小競り合いの描写が増えそうなんです…。…まっずいな。それでは、また次回



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5148o/>

---

魔法先生ネギま！オルタネイティヴ

2011年8月12日19時27分発行